仙人通信 88　黒檜山(1828m)　地蔵岳(1674m)

　赤城火山を代表する黒檜(ｸﾛﾋﾞ)山は、赤城の最高峰で外輪山である。山体の北側には火山活動初期の成層火山の地層が現存することや日本 100 名山としても良く知られている。今日のコースは当初標高 2500mあった火山が、爆発や泥流となり崩壊し、出来たカルデラ湖である大沼(ｵﾉ)→外輪山である黒檜山と駒ヶ岳・山嶺をなす長七郎山と中央火山丘である地蔵岳を廻る事とした。ビジターセンターから湖畔を歩き、赤城神社先で湖を周遊する道路と沼田方面との分岐に登山口の標識がある。周囲は山葡萄やナナカマドの紅葉が見頃だ。登山道に入ると笹・白樺・水楢で覆われ、足元は溶岩(シソ輝石安山岩)の凹凸で、昨日の雨で濡れた落ち葉で埋め尽くされ、滑る急登である。15 分程で崖上の猫岩の展望台である。先程までガスっていた大沼に日の光が差込み赤城神社の赤い桟橋が浮き上がる、なんと一服の絵である。猫岩からは、崖を西側から巻くようになり、林の中で視界は良くない。周囲のヤシオ・ミツバ・ヤマ躑躅やリョウブ、カエデが赤く色付き、雨で濡れた葉は日の光で眩い。山体がガスに包まれる中を、ひたすら山頂を目指した。登山口から 75 分程で、駒ヶ岳との分岐に、５分程で黒檜の山頂である。因みに黒檜はヒノキ科で「クロベ」で別名「ネズコ」である。残念ながら山頂には無かった。ガスで期待した視界が望めず三等三角点の標識を確認して、次の駒ヶ岳に向う。分岐点の先には、「御黒檜大神」の社が安置され、近くに背の低いマツムシソウが行過ぎる秋の和みとて２輪の花を手向けていた。

枕木状の急な階段を 10 分程下がると、緩やかな尾根の大ダルミである。アザミ・ノギク・そして紫のリンドウが笹の中から恥ずかしそうに顔を出し、紅葉に映える。駒ケ岳までの稜線ではガスが時折切れて、地蔵岳が目の前に迫って望めた。駒ケ岳の山頂は小さく、可愛いアザミがお似合いである。湖畔までの 40 分の下りは、九十九折の急な鉄製や木の階段の連続で視界は無い。

スタートして丁度３時間の周遊コースであった。続いて覚満渕の林の中を進み鳥居峠にて、長七郎山の登山口からの登りである。なだらかに整備された道傍ではタワワにナナカマドの赤い実が揺れ、小鳥たちが秋を奏でる。丁度 30 分で長七郎山と地蔵岳の中間に緑の水を湛えた小沼(ｺﾉ)が見える。更に 15 分程林道を進むと尾根に出る。小沼に遠足に来ていた小学生が「ヤホー」と叫ぶ、40 年近く忘れていた「ヤホー」を思いっきり返した。歳を感じ照れくさく苦笑いである。上り始めて１時間で長七郎の山頂に辿り付く。ガスも晴れて地蔵岳が目の前に聳える。15 分程で小沼に下る。湖畔からは青空に堂々と黒檜が勇姿を見せ、緑の水面に逆さ黒檜が見事だ。25 分程で八丁峠に出て、今日最後の山である地蔵岳への木製の階段の登りに就いた。山頂にあるＴＶやレーダードウムを見ながらの 35 分の登りである。山頂に近づくとアキノキリンソウ・マツムシソウ・リンドウが迎えてくれた。十体以上の地蔵が大沼に向かい安置されている。山頂の標識の下に、一等三角点の標識を確認した。大沼から登って来たコース全てが一望出来、大満足である。大沼の湖面から黒檜山の高さを２倍した 2500m の山体を青空に想定して、この溶岩円頂丘の地蔵や寄生火山である鍋割山や鈴ヶ岳までの形成過程等 50 万年の壮大なジオラマを描いてみた。大沼大洞への溶岩の下山コースを下り、秋の色に染まった覚満渕を一周した 6 時間半の火山を楽しんだ山旅でした。(h21.10. 1)

リンドウ

長七郎からの地蔵山頂

地蔵からの黒檜